

『丹生都比売』にみる「傷ついた子ども」

市 野 直 美

‘Wounded Children’ in “Niotu-Hime”

ICHINO Naomi

心理臨床場面は、クライアントのその時々語りが長い時間をかけて積み重ねられ、クライアントの人生の物語のようなものが紡ぎだされて心の中におさまっていく場である。そこに居合わせるセラピストは、物語の生成に立ち会い、伝承する生き証人。ひたすらクライアントの話を傾聴するのがセラピストの意識的態度ではあるが、心の中では、クライアントが語るその時その時の様々な話を意味の糸でつなぎながら、物語の展開を多様な層で予想する。語られないまま、未完の物語や言葉の断片がセラピストの中で浮かんで消えていく。常に、布置（constellation）を読みとる努力を内行的に行っているのである。コンステレーションとは、星座という意味も持つが、「ある人の内的な状態と、それを取り巻く外的な状態との間に対応関係があり」、「内的、外的事象があるまとまりのあるイメージを形成しているように思われるとき」（河合, 1991b）を指す言葉である。セラピストがコンステレーションを読み取る営みを内行的に行っていく過程と、クライアントが自らの存在や人生に意味を見いだし、自分だけの物語を生成していく過程が互いに絡み合い、並行して展開するのが心理臨床の場であると言える。

本論で試みる『丹生都比売』という作品の読みとりは、心理臨床の場でクライアントとセラピストの間で物語が生じるのに類似した、作品と、それを読む「私」の相互作用の中でコンステレーションが生じ、それを「私の物語」へと練り上げていく作業である。

こうした立場で作品を読んでいく際、注意を怠ってはならない点がある。読者の読みに応じて多様な意味を映し出すはずの作品から、ある意味を汲み取っていくことで一つの物語、筋ができってしまうことである。読者の心をうつ作品は皆、様々な色彩の組み合わせから思いがけない美しさが生まれ得るように、作者が意図した意味を超えた魅力を持つ。作者が言葉やイメージと意識的な格闘を続けるうち、自ずから無意識的な動きが生じ、言葉やイメージに躍動する命が吹き込まれるのであろう。そうして生み出された作品に意味を読みとってしまうことで捨象されてしまうものの大きさを忘れてはならない。

心理臨床場面で紡ぎ出される「私の物語」が万人に通用するものでないように、「私」が読み取った作品の意味も、「私」と作品の間で生じた産物でしかない。その意味では、本論の作業は極めて個人的な試みである。しかし、心理臨床の事例研究において「個」の追求が「普遍性」に達するように、「私」の物語の読みもまた、普遍的な意味へと通じることであろう。以下に、作品の物語を追いつつ、考察を進めていく。

1. 物語の序章

「草壁皇子は夢を見えています。

空気がぴいんと張りつめた秋の野を、おばあさまのお葬式の列が音もなく通ります。

世界は冴え冴えと澄み渡り、その果てまでも見渡せそうなぐらいです。けれどこの秋の野は、どこまでもどこまでもただ刈茅の茂りゆくばかり、行列の音もなく進みゆくほか、動くものとしてなく、不思議な明るさに隈なく満たされておりました。この明るさは日輪とは無縁のもののようにでした。皆の足下には影すらできておりません。……日のもとに生きる、すべてのものには影ができるさだめ、と菟女は言っていたのに。これほど静かで明るいのに、この秋の野には、少しも心安まる感じがありませんでした。それどころか、細い細い氷の糸が、縦横に空気に織り込まれているように、身の引き締まる思いがいたします。(略)……なぜなら、あの丘の上から凝っとこちらを見降ろしているものがあるからだ。ああ、恐ろしい。皆が見ないようにしている。けれども皆が知っている。ひっそりと、息まで押し殺して、気どられぬようにしている。あの大きな蓑笠を被ったものに。(略)……だめだ、私には見るができない……」

天智天皇の没後、息子の太皇太子と、弟の大海人皇子との間で起こる、壬申の乱の前夜、十二月の吉野。吉野の水銀（みずがね）と清らかな水を統べるご神霊、丹生都比売（におつひめ）の御加護を得るべく、祈願を重ねる大海人皇子。昇る朝日のように強くたじろがず、むしろ普段より炯々と瞳を輝かせ、闘争心を剥き出しにする鸕野讃良皇女（うののさららのひめみこ）。その二人の間の皇子が草壁である。聡明で利発、文武に秀でた大津皇子を異母兄に持つ。弓を持っただけで手が真っ赤に腫れ上がってしまう草壁皇子は、悲しく手元を見つめるのみ。鸕野讃良皇女や大津皇子が華やかに燦然と輝く太陽だとすれば、草壁皇子は、ひっそりと闇夜を照らす宿命を生き抜かねばならない月である。前者を金の道と例えれば、後者は銀の道と言えようか。

先の引用は、『丹生都比売』の冒頭部分である。『西の魔女が死んだ』で数々の文学賞を受賞した、梨木香歩の作品だ。冒頭の夢のシーンには、この作品全体を貫く通奏低音となっている、張りつめた緊張感と澄んだ哀しみがよく表れている。作者は「ひっそりと、けれど徹底して諦め抜く、魂の『練銀術』のような過程」を生きた草壁皇子と、魂の導き手としての丹生都比売のイメージが結びついたとき、この作品が生まれた、とあとがきで書いている。本論では、現代の「傷ついた子ども」たちと日々出会う心理臨床に一つの示唆を与えてくれるものとして、この『丹生都比売』を読み進めていこう。

2. 作品の舞台、吉野

この作品の舞台は、周囲を山に囲まれた、霊驗あらたかな神仙の地、吉野である。その頃不老不死の妙薬として珍重されていた水銀が採れる地でもあり、そのご神霊が丹生都比売である。大海人皇子や鸕野讃良皇女、草壁皇子らは、謀反の疑いを避けて近江の朝廷から追われるようにしてこの地までやってきた。

河合(1991a)は『とりかえばや、男と女』の中で、中村雄二郎の思想を受けて、「場所(トポス)」を「コスモロジー(宇宙論, 世界論)の強い支配」を受け「濃密な意味」を持つものとして論じている。河合は『とりかえばや』の舞台である京都・宇治・吉野を、ユングの言う、意識・個人的無意識・普遍的無意識の三層と対応させる。『とりかえばや』物語において、主人公たちの人生の岐路の決断がなされる重要な展開点となるのが吉野の地だ。憂き世(京都)を遠く離れた山奥の地であるからこそ、心の深層における新たな展開が生じたのである。

『丹生都比売』における舞台、吉野。そこに住む人々について菟女は「言葉が出ないものが多いのです。国樫人は蛙を食らい、穴に住むのでございますよ。皇子様はいずれ都にお戻りになられるお立場、地の者にあまり親しくお声をかけられてはなりませんよ」と語る。都から遠く隔てられ、山々に囲まれた、周縁性、閉鎖性をもつ吉野。また、吉野の奥には、黄泉の国への入口だと土地の人々が信じる大峰山がひろがっている。都人にとって吉野は、まさに日常とかけ離れた、此岸と彼岸の境界の地である。このことは、柳田国男の記した『遠野物語』の舞台である、ザシキワラシやカッパが住む、山に囲まれた里、遠野郷を思い起こさせる。『遠野物語』の初版序文の中で柳田は「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」と書いている。この言葉は、平地人の知=ロゴスに裏打ちされた知の通用しない、山人の知=物語を生む知、神話産生の知、の世界があること、そして山人の世界の中にあっては、平地人はただ畏怖し、ひれ伏すのみであることを示唆しているのではないだろうか。吉野は都人を畏怖させる知やエネルギーを持つ。だから、都を追われた人々が、都に拮抗する新たな力を得ようと吉野にやってくる。『丹生都比売』の大海人皇子一行もまた、都での危機を避け、蘇りの力を得ようと吉野にやってくる。これは、人が日常生活を営むのと並行して、夢の世界から無意識的メッセージを受けとりつつ、新たなエネルギーを得ようとするのと似ている。洞窟等の聖所にこもって夢の知恵を得ようとする習慣も多く残っている。吉野という場所は、そうした聖所に似た、意識の支配を許さない、未知の、異界と接点をもちうる境界の地である。そして、蘇り、すなわち異界と接することで変容をもたらす可能性を象徴しているのが、丹生都比売なのだと言える。

吉野が変容の可能性を秘めた場所であるとはいえ、菟女が草壁皇子に土地の人々との接触を避けよと諭しているように、吉野の知に開かれることは、都人の知を崩壊せしめ、戻れなくする危険すらはらむ。蘇りの力を得る、変容するというのは容易に叶うことではない。大海人皇子は来るべき大友皇子との決戦に向けて丹生都比売の御加護を受けて蘇りの力を受けようと、「……何としてでもこの斎庭(ゆにわ)にお顕ち願わねばならぬ。この一戦の勝敗はそれにかかっているのだ」と、神事に励む。しかし、一向に顕現されず、ひとり苦悩せねばならない。己の益を求めて祈ることは、神を支配しようとする事と同義である。夢見手は夢を支配することができない。敬虔な態度で訪れを待つことができるのみだ。「我」=意識の論理で無意識の力を得ることはできない。

草壁皇子は丹生都比売に対し、大海人皇子と対照的な姿勢をもっている。ある時、灰色の雲の間から次第に広がる光を見て「その荘厳な威厳のようなものに打たれて、思わず、皇子は、……丹生都比売さま……と、呟く。大いなるものに触れて心震え、自然にひれ伏したときに生じる祈りである(このとき、次節に述べるキサが共にいたことも極めて重要である)。草壁皇子と吉野の知との関係については後節で論じることになる。

3. キサとの出会い

草壁皇子はある日の夕方、蛇に踵を咬まれた同じ歳くらいの少女と出会い、毒を吸い出して彼女を助ける。少女は、瑠璃のような、銀の滴のような形の勾玉を黙って差し出す。「黒目の大きな、色の白い子」で、「どこか雅た様子」がある少女。彼女の様子から、言葉が出ないのだと気づいた草壁皇子は、そのとき目の前にそびえていた象山のキサ、喜佐谷のキサにちなんで「キサ」と命名する。

蛇に咬まれるというモチーフは、何もかも呑み込み、未分化な混沌へと退行させる、否定的なグレートマザーに囚われた状態を連想させる。また、蛇に咬まれた少女の解放というテーマは、海蛇への犠牲に供せられ、囚われたアンドロメダをペルセウスが救出するギリシャ神話も思い起こさせよう。このテーマに、グレートマザーに囚われたアニマの救出、と用語をあててしまうのは牽強付会に過ぎる。少なくとも、何か否定的なエネルギーに囚われ、封じられていた新しい可能性と出会う場面であると言えよう。

草壁皇子は、弓を持っただけで手が真っ赤に腫れ上がってしまう、現代で言えばアレルギー体質であったことをここで再び指摘したい。筆者は全く専門外であるが、多田（1993）によると、本来「細菌やウイルスの侵入をボーダラインで抑え、微妙な共存関係を作り出す」働きが免疫であるが、その共存関係が崩れ、頑なに共存を拒否するようになったのがアレルギー反応だという。草壁皇子は、極論すれば、己にとって異質なもの（多田の言う「非自己」）を適度に受け入れ、共存することを拒否している。少なくとも、当時、為政者たらしとする者の息子としては、例えば文武に秀でた大津皇子と比較すれば、決定的に敗者である。大海人皇子と鸕野讃良皇女の息子として期待される己の存在の意味を、意図的ではないにしろ拒否する以上、独自の物語を見つけたし、生き抜かなくてはならない。

その草壁皇子が、毒を吸い取るという行為により少女を救う。この行為は、これまでの共存の拒否を越え、自らの身体を媒介にして、吉野の知のもつ新たな可能性が囚われている否定的なエネルギーと接点を持ち得た、と言えよう。例えば先に挙げたギリシャ神話のように西洋の典型的な英雄物語であつたら、大蛇と対決して救い出した女性と結婚するといった物語にもなるシーンである。しかし草壁皇子は、未だ蛇の正体には触れていない。直接対決するのではなく、癒しの知によって、少女を救済したのである。

この少女は言葉を持たない。これは、都人＝平地人＝ロゴスの世界で生きる人々、とは全く異質な存在であることを意味する。この作品世界の中では吉野を具現する人物という意味を担うと言える。草壁皇子が少女につけた名は、吉野の土地にちなんだものである。命名するという行為によって草壁皇子は、吉野という場所、吉野の知を象徴する少女と自らの関係を定位し、心の中に居場所を与える。草壁皇子が、容易に理解を許さない未知の魅力に心を開くとき、その存在は、新たな変容可能性をもたらす心の導き手となりうる。

「キサは、草壁皇子がこれとって楽しい遊びをしなくとも、勇敢に野山を駆けることができなかった、少しも草壁皇子を蔑んだり、哀れんだりしませんでした」。草壁皇子はキサとただぼんやりと空を眺めたりして共に時を過ごす。「不思議なことでしたが、キサは草壁皇子が、明るい、楽しい心持ちでいるときには……そういうことはあまりありませんでしたが……決して現れたこと

はありませんでした。物言わぬ子でしたが、それだけ草壁皇子の気持ちを、濡らした布のようにひたひたと感じ取り、聞き取るようでした」。キサは、草壁皇子を黙って無条件に受け入れてくれる存在である。両親に期待されている存在の意味を失った草壁皇子にとって、キサとの出会いは全く鮮烈なものだったことだろう。彼を哀れみ、優しくいたわってくれる関係は既知のものだった。しかし、キサはあらゆる価値判断と無縁に、草壁皇子を受けとめる。ここでは存在の意味が問われることすらない。草壁皇子そのものであればいい。

清水(1984)は、良心的な人が障害者の気持ちによりそい、代弁をするとき、相手を「弱者」と捉え、今ある人間関係の中に彼らをとじこめてしまう、と指摘する。元型の分裂という観点からこの言葉を理解することができる。グッゲンビュール・クレイグ(1978)は、人は元型の二つの極を持って生まれてくる、と言う。その一方の極が抑圧されるとき、抑圧された部分は外界に投影され、関係が硬直してしまう。グッゲンビュールはとりわけ「治療者-病者」元型を取り上げている。ある人が病気になった場合、「治療者-患者」元型が布置され、外的に治療者を求めると同時に、自身の内的治療者が活性化され、癒される。しかし、病者が治療者元型を医師に委ね、ただ患者であるだけの存在になるとき、永遠の患者となりはてる。清水が、障害者は「弱者」ではなく「敗者」であると言うとき、「弱者」元型を分裂させて彼らに投影し、己を「弱者をいたわる良心的な強者」に置くことで、甘い偽りの共感関係が生じ、その実、対等な関係が生じ得なくなる危険性に注意を促しているものと考えられる。

自己の存在の意味を失った「敗者」である草壁皇子と、彼をそのまま受けとめるキサの出会いは、「傷ついた子ども-癒し手としての童子神」元型が布置されたと言えるのではなからうか。蛇に咬まれたキサを救うというテーマは、草壁皇子の心の内と外に「癒し手としての童子神」が布置された、という意味も持っていた。「キサといると、語ることより語らぬことの方が、ずっと貴いことのように思えてくる」と草壁皇子は感じる。草壁皇子は次第に吉野の知に開かれていく。

4. モ マ

モマは、聞く者に不安と恐怖を呼び起こさずにはおかない恐ろしい声で真夜中に「ギャー」と鳴く化物である。草壁皇子は、今まで吉野で命を落としたものたちの怨霊の叫びのように思い、恐れおののく。その正体は誰も知らない。未知のものである点で、キサとモマは共通する。しかし、前節で考察したようにキサは、草壁皇子を受け入れ、新たな知に導いてくれるものであり、吉野の肯定的なイメージを象徴する存在である。それに対し、得体の知れない闇であるモマは、否定的な側面を象徴する。

心の闇の部分、「個人の意識によって生きられなかった反面、その個人が許容しがたいとしている心的内容」(河合, 1967)をユングは「影」と呼んだ。否定的なイメージと重なって現れることが多いが、「今後、自分の中に取り上げられ、生きてゆかねばならない面」でもある。「影」は、自我を脅かすものであると同時に、心の導き手ともなりうる。

まず、鶴野讃良皇女と「影」の関係を見ていこう。ある時、草壁皇子は夢うつつの状態で、影と向かい合う鶴野讃良皇女の姿を見る。「簾の向こうにその影が見えます。大きな大きな人形が、うずくまっているような影が。それはやはり大きな大きな簀篋で顔を隠しておりましたが、

草壁皇子にはそれが何であるかすぐわかりました。……おかあさまが鬼に喰われてしまう……（略）おかあさまはあれと対峙なさっている。あれを封じていらっしゃる。あれが動き出さぬように……。先に筆者は鶴野讃良皇女を華やかに燦然と輝く太陽にたとえたが、太陽の光が強いほど、影は濃く、暗く映るものである。鶴野讃良皇女は、鬼＝「影」と真っ向から対峙し続ける。決して「影」が動き出さぬように。人は誰でも影を持つ。「影」も自己の一部であることを認めようとしないうちに自我は、自分の「影」や周囲の人に投影された「影」に脅かされ、生き方や人間関係が偏狭で平板なものとなってしまう。鶴野讃良皇女は、己の一部と認める強さを持つからこそ、対峙し続けられるのかもしれない。草壁皇子は母の姿に「恐ろしいほどに真っ暗な、底知れない孤独の淵を覗いたように」思う。鶴野讃良皇女のように、意志の力で己の闇と対峙し、息詰まる緊張関係を維持し続けるのも、「影」との関係の一つの形である。しかし、意志の力＝ロゴスの力が強大になるとき、エロスの力は行き場を失う。孤独が副産物となるのは必然である。

草壁皇子の場合はどうか。吉野に来て初めて体験したモマの声は、彼にとって不安と恐怖をもたらすものでしかなかった。到底関係を持ちうる対象ではない。しかし、己の存在の意味が打ち消されようとする出来事に立て続けに遭遇した後、展開が起こる。一つは、父母の命令で何人もの兵が自分を狙い、ついに矢に身体を射し貫かれる夢を見たこと。もう一つは、草壁皇子が世話していた燕の雛の死であった。その雛は他の雛より弱く、親鳥から餌をもらい損なっていた。親鳥はその弱い雛に気づかないのではなく間引くつもりなのだ、という悲しい現実を悟ったとき、皇子が自ら育てようとした雛だったのである。父母をはじめ周囲の人から哀れみの視線を向けられ、悲しみに浸る「弱者」だった草壁皇子は、これらの出来事を体験することで、父母の期待にかなう息子になり得ない「敗者」の運命を自覚し、直面せざるを得なくなった。その哀しい自覚が彼に転機をもたらす。

「……あれを、退治するのだ。そしておかあさまにお見せするのだ……」象山の方に飛んでいく大きな鳥を見つけ、モマの正体だと確信した草壁皇子は、矢と弓を取り、夢中で追いかける。手はかぶれ、茅の繁みで手足が切れるのも構わずに。その途中、キサに会う。キサは無言のまま、先に立って歩き出す。キサが指さす藪を草壁皇子がつつくと、出てきたのは虻だった。自分を信じ切っているキサの視線を受けた草壁皇子は、虻に弓を突き刺し命中させる。これこそ、キサの踵を咬んだ蛇だった。

キサとの出会いの時点ではそのエネルギーの痕跡を見せるのみだった蛇が、ここで正体を現す。草壁皇子にとっては一つのイニシエーション体験だった。これまでは弓を持つことすら出来なかったのだから。異質なものと共存を拒否してきた「弱者」の自分を超え、モマが象徴する闇の世界に夢中で足を踏み入れる。そして、キサの無条件の信頼に出会い、蛇と対等以上に渡り合える関係を築いたのである。キサ＝「癒し手としての童子神」は直接草壁皇子を助けはしない。彼を導くが、乗り越えるのは彼自身である。キサはただそれを信じ、まなざしで支える。その対等な信頼感は、これまで草壁皇子が決して手に入れられなかったものである。今や草壁皇子はモマとキサの導きに応じる強さを得た。

草壁皇子はさらにキサの導きで大きな穴の中に進んでいく。躊躇せず地下を流れる川の流れに身を投じるキサに続き、草壁皇子も夢中で飛び込む。たどり着いたのは、水銀が鏡のように溜まり、不思議な煌めきを放つ水底の国だった。草壁皇子の懷から燕の子の死骸がすっと飛び出し、

銀灰色の星になる。「草壁皇子は、秋の野原の、澄みきった寂しい明るさと冷たい風を感じるようでした。美しさと切なさで胸が痛くなるのです。けれど不思議に懐かしい安らぎの中にもいるようでもありました。……醜い欲も、たぎるような感情も、やがては哀しくなって、土が水銀に精錬されるように、このような美しい珠になるのだろうか……」。さらにキサの招きに誘われて行きかけた草壁皇子は、度を越した水銀は人の命を奪うと言う菟女の言葉を思い出す。すると水底から銀色の輝きを持つ黒い大きな鳥が湧きあがる。モマだ。その背に乗って、上昇していくキサを追い、飛び立つ。

その頃、神業に励む大海人皇子の前に、銀に輝く神御衣を纏った神々しい丹生都比売が顕現し、その後、流れ出る水とともに草壁皇子が現れる。大海人皇子は草壁皇子が命がけで丹生都比売の顕現をもたらしたのだと悟り、力強く草壁皇子を抱きしめる。

逃れようのない「敗者」の運命の哀しい自覚に直面した草壁皇子は、今やキサとモマ、言い換えれば肯定的な意味も否定的な意味も持つ吉野の知の導きに己を委ねる。死をも恐れなかった。草壁皇子は、このとき初めて、かの秋の野原の光景（冒頭の夢を参照）に安らぎを見いだす。彼が「敗者」を生きるとき見いだしたのは、己の闇、吉野の闇（＝モマ）と対決し、力で克服するのではなく、その導きに従い、己を捨てて飛び込む生き方だった。最初はモマを退治することで母の期待に沿おうとしたのであったが、モマやキサの導きに心委ねるとき、癒しがもたらされた。キサと同様モマもまた、魂の導き手であったのだ。確かに死の淵まで行ったのであるから、危機的状況だったのであるが、死の淵を通して初めて変容が生じ、死だけでなく再生をももたらすのである。「傷ついた子ども」元型を徹底的に生きたとき己の中の「癒し手としての童子神」が布置される。英雄の、力による解放ではなく、吉野の知による癒しがもたらされる。

生還した草壁皇子に鷗野讃良皇女は、大海人皇子が捕らえたというモマを見せる。「栗鼠のような愛くるしい顔をした」、「ふわふわした毛に包まれたかわいらしい生き物」だった。「これがそなたを死ぬほど脅かしたものの正体です」と鷗野讃良皇女。草壁皇子はこのモマが「なんだか愛しく思われて」きて、飼いたいと申し出る。

水銀は、美しい煌めきを持ち、丹薬となりうると同時に、毒薬にもなる。吉野はキサを生み、かつモマを生む。キサは、生きるエネルギーも与えるが、己を失い心奪われるとき死をももたらす。モマもまた、恐怖と不安をもたらす得体の知れない怪鳥の側面と同時に、草壁皇子を水底の国から救い出す面や愛くるしい可愛らしさをも持っていた。人の心の中に様々な対極性が息づくように、完全な善、完全な悪はあり得ない。「影」に恐れおののくのではなく、後を追い、導きに従ったとき、その肯定的な意味が、初めて現れる。モマに怯える→蛇の毒を吸い取る→モマを追う→蛇を退治する→モマに救われる→モマを飼う、と整理してみると、草壁皇子が辿った吉野の闇＝「影」との関係の変遷を見て取れる。退治した段階で終わったら、闇は必ずや別の形で力を得、再び脅かしてくるだろう。「影」を恐ろしい異形のものにすることも、飼う＝共に生きるものにするのも、本人次第なのだ。ロゴスの力で孤独に「影」と対峙する鷗野讃良皇女と対照的に、草壁皇子は、吉野の知の導きによって「影」と関係を築き、共に生きる道を見いだした。そこには「懐かしい安らぎ」、エロスがある。

5. 鸛野讃良皇女の哀しみ

丹生都比売の顕現を導いた草壁皇子の枕元で鸛野讃良皇女は「……おお、どうか草壁の魂が、ふらふらとさまよい出ることのないように、まちがっても、鬼に出くわすことのないように」と見守る。さあ、さあ、さあ、さあ、と闇の向こうで鬼が促す。「あの鬼は私にはなじみのある鬼だった」。ある夜鬼が見せた夢を思い出す。鸛野讃良皇女やおばあさま、おねえさま、おかあさま等、皆で葉狹へ行った。けれど鸛野讃良皇女の触れる紫草は、みな枯れてしまう。「ああ、つらい、悲しい。すぎるような思いでおかあさまを探すと、おかあさまは小さい赤子の草壁皇子をお抱きになって、今は観世音菩薩のような穏やかな顔でおっしゃった。——草壁皇子をかわい、愛しいとお思いなら、離れておいで、と。(略)私はその自分の肩の後ろでほかでもないこの鬼が、背中合わせにひっそりとたたずんでいるのに気が付いたのだった……」。

草壁皇子は、鬼と対峙し続ける鸛野讃良皇女の姿に、底知れない孤独を見た。鸛野讃良皇女もまた「傷ついた子ども」だった。五歳の時、自分を慈しんでくれた祖父の一族が、父天智天皇に謀反の疑いをかけられ滅ぼされるという体験をしているし、祖母が病弱の弟を特別可愛がっていたというエピソードもその傍証となる。鸛野讃良皇女もまた、心の闇、死の世界、無意識の持つ抗しがたい破壊の力に触れざるを得なかった子どもだったのだ。フロイトの言葉を借りれば、これは「死の欲動」と言えようか。伊藤（1988）はフロイトが死の欲動を仮定するに至るために、憎しみは性欲動からではなく「自我が自身を維持し、肯定するための闘いから生じる」と認識することが重要であったと指摘する。鸛野讃良皇女は、自分の生命、存在の意味、尊厳を守るために、鬼を生み、それと対峙し続ける運命を選んだのかもしれない。そして、その力で歴史の中に燦然と輝く存在の証を手に入れることになる。その代償として、孤独と共に生きねばならなかったけれど。

草壁皇子と鸛野讃良皇女、ここに「傷ついた子ども」の二つの対照的な生き様を見ることが出来る。

生還から一夜開けて目を覚ました草壁皇子は、鸛野讃良皇女が一晩中付き添ってくれていたことを聞き、「……ああ、それもおかあさまの真実……」と心の中で呟く。草壁皇子は鸛野讃良皇女の中に鬼と、そして慈母の対極を見る。鸛野讃良皇女は草壁皇子の中に決定的に「傷ついた子ども」と、そして「癒し手としての童子神」の対極を見たことだろう。

この後、丹生都比売の御加護を得た大海人皇子軍は、大友皇子を自害に追いこみ、大勝利を収める。世に言う壬申の乱である。

6. 物語の終章 —— 銀の道の行く末

物語はここで終わらない。

大海人皇子、後の世の諡で天武天皇が亡くなった後、すぐに鸛野讃良皇女が政務につき、まもなく大津皇子は謀反の疑いをかけられて処刑されてしまう。そして草壁皇子も、天武天皇没後三年、鸛野讃良皇女に見守られながら、息をひきとる。典藥寮に出る鬼が、丹薬を持ち去るという噂がささやかれていた最中のことである。

「此岸から彼岸へ渡る意識の中で、草壁皇子はおかあさまがご自分の手をとって優しく撫でてくださいのを感じました。(略)最後の力でおかあさまに微笑んでおあげになりました。」その微笑みは鸕野讃良皇女の目に観音様のように映る。そのとき鸕野讃良皇女は、草壁皇子の手の中で煌めく銀色の勾玉に気づく。「おかあさまはそれが、息子の体内に溜まった丹薬の、水銀と還った末の、美しい結晶のように思われたのですでした」。

作者にこの作品を書かせた「母后持統天皇による愛児草壁皇子の抹殺」という悲しい推論。「誰の咎か。誰がこの責めを負うのか。誰が過った。……過ったものなどいない。誰も過たなかった。おとうさまもおつらかったことであろう。——おとうさまはおつらかったらうか。おとうさまはおつらかった。だがどうにもならぬことであった」かつて鸕野讃良皇女は、祖父を死に追いやった父を思い、こう心の中で呟いた。鸕野讃良皇女は辛かった。でも己の金の道を生きるためには、どうしようもないことだった。鸕野讃良皇女は慟哭する。心の中の慈母が泣く。鬼も泣く。

草壁皇子は若くして命を失った。悲劇の皇子として名を残した大津皇子や、優れた為政者となった鸕野讃良皇女(持統天皇)とは異なり、歴史の流れの中に静かに、ひっそりと埋もれていった人生。しかし、草壁皇子は、己の運命を生き抜いた。天智天皇や鸕野讃良皇女や、皆の哀しみをひっそりと吸い込んで。いずれそれが水銀のような美しい珠になり、安らぎがもたらされるように、と願いながら。静かに自己犠牲の道、銀の道を選びとり歩んでいった。

「空気の澄みきった、寂として明るい秋の野原のようです。その真ん中を一筋、葬列が音もなく進んでいきます。葬列の足元には、やはり、影が落ちておりませんでした。(略)丘の上にはやはり鬼が立って、静かに葬列を見降ろしておりました。鬼は、蓑笠をもう、すっかりはずしておりました。そして、その蓑笠と見たものは、今はもうその正体を明かして、鬼の肩先に止まっておりました。それは、あの少年の日、草壁皇子が茅で血まみれになりながらも必死で後を追った、あの怪鳥のモマだったのでした。

鬼の大きな二本の角の下、窪んだ眼窩には二つの大きな目がありました。鬼は身動き一つしませんでした。ようやくあらわに見えたその顔の、痩せこけた頬には涙がほろほろと伝わっていました。蓑笠の中で、鬼は泣いていたのですでした。

その涙が頬から落ちるとき、やはりあの澄んだ鈴の音がするのです。そして落ちたと見えた涙の珠は、星のように煌々と空の高みへ昇って行きました。……ああ、そうであったのか。この野原の、凍り付いたように明るいのは、鬼が恐ろしくて、皆が緊張しているからではなかったのだ。鬼の哀れで、凝り固まっていたからであったのだ……」

7. お わ り に

『丹生都比売』は、遠い昔、人々が闘い、国の基礎を築いた英雄が輩出した時代の物語である。しかし、草壁皇子や鸕野讃良皇女の、「傷ついた子ども」の生き様は現代の我々の心に訴えて止まないものがある。確かに、当時のように圧倒的な暴力的力に翻弄される子どもは多くない(勿論地球規模で見たら今なお絶えないであろうが)。しかし、闘いのない日本においても、身体的、性的、精神的虐待に晒されている「被虐待児症候群」の存在が次第にクローズアップされている。それにとどまらず、現代の子どもたちは皆、その存在の意味を一枚一枚生皮をはぎ取るように奪

われていく、水面化で進行し、あらがえない過程に身を置いているのではないか。そして大人である我々の心の中でも、存在の意味を失った「傷ついた子ども」が涙を流す。

心理臨床に携わる者に、何が出来ようか。心の傷、心の闇をないものとし、永遠に封じ込めることは何人にもできない。勿論、臨床家が癒しを与え、傷をなくしてやることも不可能だ。『丹生都比売』は、二つの対照的な生き様を示してくれた。一つは、心の傷や心の闇と意志の力を拮抗させ、緊迫した関係を保ち続ける、そしてそれを生き抜く力にしていく、**鷗野讃良皇女**の辿った金の道。それは燦然と輝くが、孤独の道でもある。そしてもう一つは、草壁皇子のような、徹底して己の傷に直面させられたときに生じる静かな諦めを生き抜き、闇と共に生きる銀の道である。

ここで再び作品世界に立ち戻り、この作品全体を一人の人の心の世界の中の過程として振り返って見てみよう。己の「影」を押し、ロゴスの力、意志の力で輝かしい金の道を歩もうとする**鷗野讃良皇女**＝「自我の力」。自我の一面的支配の陰でエロスは傷つき、孤独に耐えねばならない。存在の意味を奪われ、哀しみを胸に銀の道を生きる草壁皇子＝内なる「傷ついた子ども」。都を追われる危機的状況＝分裂に引き裂かれる「魂の危機」→境界の地、吉野を訪れる→キサやモマとの出会いは「未知なるエネルギー、無意識の肯定的、否定的表れ」と触れる→内なる「傷ついた子ども」が「敗者」の運命を生き抜き、無意識の導きに応じる強さを得たとき、「癒し手としての童子神」の布置が生じ、蘇りの力を得る（吉野の知、無意識の知からエネルギーをもらうことが出来るのは「自我」ではなく、「傷ついた子ども」である）→草壁皇子の自己犠牲にあい、鬼が涙を流す＝「傷ついた子ども」が「自我」の孤独に気づくように、「自我」が「傷ついた子ども」の哀しみに気づく→「自我」にもまた癒しがもたらされる。

怪鳥モマを肩にのせ、涙を流す鬼の別の姿は、愛らしいモマと共にいる、神々しいキサでもあるのだ。作品の最後の光景はこうである。

「とても安らいだ心持ちで、皇子は漂っておりました。（略）銀に輝く衣装に身を包んだ、キサがおりました。キサは、慈しむように片手を上げ、鬼の涙の珠を、星々のように周りに巡らせておりました。キサの肩先には、今は愛くるしい姿形をした、栗鼠のようなモマがちょこんと止まっておりました。（略）銀の神御衣を纏ったキサは、心持ち眼を伏せ、美しく穏やかで、威厳に満ちておりました。……丹生都比売さま……草壁皇子は思わず泣きました。すると、キサはいつかのように微笑んで草壁皇子を手招きしました。（略）草壁皇子は、今度はためらうことなく、まっすぐにキサの国へ向かうのでした。それはついに銀に至る道でした。」

金の道、銀の道、いずれも最後には「醜い欲も、たぎるような感情も、やがては哀しくなって、土が水銀に精錬されるように、このような美しい珠になる」。筆者にとって『丹生都比売』という作品は、人が、金の道の孤独と銀の道の哀しみを知るとき、魂の全体性へと導かれる、第三の道が開かれてくる、という臨床の知をもたらしてくれる作品であった。「傷ついた子ども」や、内に「傷ついた子ども」を抱える大人に日々出会う臨床の場で、心理臨床家に出来るのは、キサやモマを生む吉野の知、臨床の知に触れて生きる者として、クライアントが選ぶとる道の同行者となること、そしてクライアントの心の中の「自我の力」と内なる「傷ついた子ども」の両者に気づき、それぞれが生き抜くことが出来るよう、まなざしで支えること、ではないだろうか。

引 用 文 献

Guggenbühl-Craig, A.: Macht als Gefahr beim Helfer, S. Karger AG, 1978.

(『心理療法の光と影——援助専門家の〈力〉』樋口和彦・安溪真一訳 創元社 1981)

伊藤良子 「「死の欲動」論の彼岸」 山中康裕, 齋藤久美子 (編) 『臨床的知の探求・下』 創元社 1988

河合隼雄 『ユング心理学入門』 培風館 1967

河合隼雄 『とりかえばや, 男と女』 新潮社 1991a

河合隼雄 『イメージの心理学』 青土社 1991b

梨木香歩 『丹生都比売』 原生林 1995

清水真砂子 『子どもの本の現在』 大和書店 1984

多田富雄 『免疫の意味論』 青土社 1993

柳田国男 『遠野物語』 角川書店 1955 (初版は1910年)